

英文學形式論

夏目漱石述

夏目漱石 述
皆川正禧 編

英文學形式論

岩波書店刊

大正十三年九月十日印
大正十三年九月十五日第一刷發行

英文學形式論

定價一圓五十錢

版權

所有

編者

水戸市露入工町

皆川正禧

發行者

東京市神田區南神保町十六番

岩波茂雄

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

三秀舍

發行所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩波書店

電話四谷二九七三番
振替口座東京二六二四〇番

は し が き

これは明治三十六年夏目先生が始めて東大の講師として、三月から六月までに英文科の學生に與へられた講義の抄録である。大正八年の暮郷里越後に起臥して居た自分に在京の野上白川君から漱石先生の此講義の草稿がどうしても見當らないから當時の聽講生たる自分共のノートより編成しては呉れまいかとの相談があつた。自分はその翌春から上京する事になつたので、あの講義を聽いた筈の諸知友にノートの借用を申込み、小松武治、吉松武通、野間眞綱、三君のノートを得、自分のそれとを對照取捨して草稿略三分の一に達した時、新設の水戸高校に赴任

する事になつたが、當時編纂進行中であつた漱石全集の拾遺の部に收録することにならうとの話もあつたので、入學試験や採點などの可なり多忙の中に此を取り急いだ。七月には上京して故先生の書齋に付いて引用文を誤正し、不完全ながらも兎に角四人のノートを一冊に纏めた。そして、それを始め話を懸けた白川氏に送り、氏を通して全集編纂の小宮君の手許に出し、恩師への輕微の役立を喜んだ次第であつた。然し都合あつて拾遺部に入れる議は止み、單行本とすることに決定したが發行はそのまゝ延びて今日に及んだ。然るに今度自分は英米へ外遊する事になつたので、豫て氣懸りであつた此抄録の出版を急ぎ、且つ書肆の註文と小宮君の忠言に従つて、引用文には新に譯文を附し、本文中に使用された原語は出来る丈此を和譯し、若くは原語を振假名として和譯に施すこととした。

自分は此抄録が僅かに先生の講義の形骸を収めたに止まる、極めて不完全のものであることを自認する。一昨々年此草稿の大部分を作つた時は入學試験の採點中であり、今度引用文の和譯を了へたのは外遊の旬日前で、共に繁忙中の努力であつた、然しこれは不完不備のものを作るに至つた何等の口實ともならない。若し爰に自分の無能を辯護する或ものがあるならば、吾々四人のノートその者のに云ひ分のあつたことである。記憶する。夏目講師が、ラフガデオ、ハーン氏に代つて、不必要な文學のみを語つて語學を教へないと云ふ理由で、大學を逐はれた（少くも吾々は當時左様思ひ込んで居た）小泉八雲先生に代つて英文科の教壇に立たれた時、好感を以て迎へた學生は決して多數ではなかつたことを。教室内見渡す所、或者は頼杖をしたまゝに新しい講義者の講義を聞き流さうとした、或者はベン

を執ることさへなくて居眠りに最初の幾時間を過した。これは崇拜に近い愛敬を以て奉戴したる小泉先生を追ひ出したる、餘りに語學に熱心なる當局者に對する憤怒を罪のない新講師に向けたものであつた、投げ付けられた石を嚙むブルドッグの怒であつた。これ等の馴らされない老犬等に最初から忠實なるノート取りの骨折を望まれない理由はある。それとハーン先生の章稿無しの口授を筆記するに忙殺された學生には日本語の講義が解り過ぎてノートにするには反つて小面倒であつたであらう。斯くして自分及び他の三君のノートが同じ程度に粗略で同じ程度に解りにくく、同じ程度に誤字脱句の多かつたのは當然である。

自分は勝手に此抄録を英文學形式論と名付けた、先生の與へられた題號は文學の概念(General Conception of Literature)であつて、先づ文學に付いての古來の諸定義を

批評し、文學を内容と形式とに大別し、先生自身を英文學に付き普通の習養ある日本人の代表者と見做して、その内容形式の何れの程度まで理解し得るかを吟味すると云ふ態度で此講義を始められたのであつた。然るに時間の缺乏の爲形式の部を辛じて終へたに止まり、初めに約束された内容其外の部は觸れずにしたつたのである。それで自分の題名は講義所説の範圍に重きを置いた次第である。

先生は次いで同年の九月から二箇年に亘つて文學の内容論を講ぜられたのが文學論である。此形式論は文學論の前編であることは明白であるが然し文學論に於ては此所に取られた特別の態度と講義の様式とを一變せられて居る。そして、彼所に致された努力と、努力の齎らした結果が、歸朝早々に與へられた講義のそれとは同日のものでないことは云えまでもない。此は先生の大學の講座に於け

る小手調であつたかも知れない。

不審に堪へないのは先生の草稿が遂に見出されないことである。或は故意に破棄せられたとも想像される。さる場合には此抄録の發表は故先生の意志に背いた行動ともなる譯だが、火刑に逢ふべき程の罪科を認めることの出来ない愚かの自分は、唯これを普通の紛失の場合としたい。

はしがきを卒へるに當り、ノートを貸與された上述の三君に感謝する。そして吾々四人の筆記が同様に拙いと云つたのを怒らないやうお願いする。次に此抄録を慫慂された臼川君と、小宮君に感謝する。最後にノート蒐集の最初より助勢を蒙つて居る廣田君、譯文に助力を受けた水高のリチャーズ君、久保君、高田君に感謝する。

大正十一年九月三十日

皆川正禧

再　　び

八

自分の外遊中に出版さるべき筈であつて、小宮君の獨逸留學と、震災其他の障害の爲め延び／＼になつた漱石先生の英文學形式論は此度更に目を通した上に印刷に附するやうにしました。前年書いた序文の中に云ふべきことは云つておいたが、此所に申したいのは此抄録が極めて不完不備で句、文の脱漏が多からうと云ふ懸念であります。それで讀者諸賢別しては自分等と一緒に此講義を聞かれた同窓諸君に御讀了の際可笑いと氣付かれる箇所があらば、御叱正の勞を惜まれな事を御願ひしたのであります。

愈々印刷に附するに先ち、安倍能成さんが原稿に目を通され、釋語其他に付いて、いろ／＼と助勢を與へられたことを感謝します。

大正十三年三月

水府新大工町寓居にて

編　　者識す。

目次

は し が き	1
文學の一般概念 (General Conception of Literature)	1
文學の形式 (Form)	110
I の A、智力的要求を満足する形式 (Form pleasant as satisfying intellectual demands)	111
I の B、雜のもの (Miscellaneous)	112
I の C、歴史的趣味より來る形式 (Form chosen by our taste cultivated in historic development)	114
II. 音の結合を生ずる語の配列 (Arrangement of Words as conveying combination of Sounds)	117
總括	118

文學の一般概念 (General Conception of Literature)

吾々の日常使用する言語の中には、其内容の曖昧ヴァエーグ、アムド、オプスキューア朦朧ミューレンなものが多い。吾々は此を使用するに當り、その内包インテンスイーヴ外延アムド、エクステンスイーヴ、ミーンンゲの意味を知らずに唯曖昧の意味を臆フリンげに傳へる。此を傳へられた人も、亦曖昧に聽いて曖昧に解するのみである。更に或場合には符號シンボルの表はす内容に付き、何等の概念コンセプションなくして用ゐることさへある。そ

れで、必要があつて或言葉の意義を確めようとする時若くはその意義を他人に問はれた場合に當つては、遂に要領を得ないことが多い。これ吾々が内容其者を思考の材料としないで、記號シンボルその者を以て考へるからである。文リテラチュア學と云ふ言語も此種の言葉の一である。

普通の教養を持つて居る人々の目には、文學なる言葉は極めて解し易いものゝやうに見える。だが、此言葉の内容が甚だ漠然として居ることは争はれない事實である。今數個の西洋の學者に付き、彼等が文學をどんな風に解譯したかを見ると、中には文學の概念を述べることなしに直ちに此を取扱つて居るセンツペリーの如き人も居る(マッスュー、アーノルド(Matthew Arnold, 1832-88)は「文學とは世界に此まで考へられ、云はれたるものゝ最善ベストを知得アックエントさせるものだ」と茫漠たる定義を與

へて居り、ヘンリー・ハラム (Henry Hallam. 1777—1853) は、彼の文學史中に人間知識のあらゆる方面を網羅し、微積分學あり、ケプラーの積分學あり、ベエコン、スピノーザ等の哲學あり、思想情操に關する一切の書を蒐めて、これを文學と見做して居る。彼は文學の定義より出立しては居ないが、文學に就いての彼の概念は暗々裏に玩味することが出来る。英國のバックル (Henry Thomas Buckle 1822—62) もこれと同じく文學に廣い見解を持して居る。その『英國文明史』(History of Civilization in England) に文學と政府とが文明に如何なる影響を及ぼせるかを論ずる章に
“I use the word “literature” not as opposed to science, but in its large sense, including everything which is written,—taking the term of literature in its primary sense, of application of letters of records of facts or opinions.”

(余は文學なる語を科學と云ふ語に對照して使用するのではなく、此を廣義に取り、記述された一切のものを包含させるのだ。即ち事實や意見の記錄に文字を適用することと云ふ、その最初の字義で使用するのだ。)

と云つて居る。斯の如く文學に廣い意味を附する人のある爲め、文學の範圍は判明しにくくなる。博士ジョンソンはボープ傳の終の所に、

“After all this, it is superfluous, to answer the question that has once been asked, whether Pope was a poet? otherwise than by asking in return, If Pope be not a poet, where is poetry to be found. To circumscribe poetry by a definition will only show the narrowness of the definer, though a definition which shall exclude Pope will not be easily made.”

(かうして見ると、ボープは詩人であつたか否か」と云ふ嘗て問はれた質問に對しては、ボープが詩人でないとする、詩は何處に見出されるか」と云ふ反問を以て應ずるより外にしやうがない。詩と云ふものを、一個の定義で以て制限するのは、只其定義者の狹量を示すに止る、假令ボープを排除し去るやうの定義を骨折つて造り上げた所で、)

と云つて居るが、爰にジョンソンが詩に付いて論ずる所をば、同様の威力を以て文學の定義に應用することが出来る。

文學 *literature* と云ふ語は羅甸語の *littera* (文字)と云ふ語に起原して居る。それが今日の意義に發達するまでには、轉々使用せられる中に、何等の約束もなく、唯以心傳心に幾度か内容の變化を起して居る。此漠然たる意義のものを唯一行や二